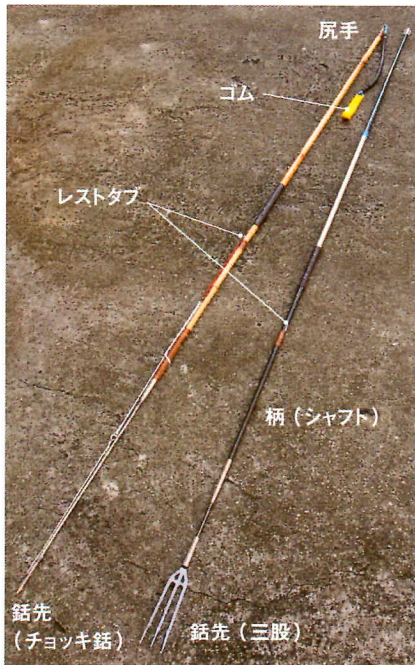




●手銛のいろいろ



スピアフィッシングに使われる手銛は、全長3m前後が一般的。長ければ、それだけ遠くの魚を突くことができるが、反面、水中での取り回しが難しくなる。購入する場合、価格はピンキリだが、高ければ突きやすいというものではない。素材や浮力によって、突くときの軌道が異なるので、まずはひとつの手銛を使いこなすことが重要だ。

でも、素足で泳ぐのは困難になる。また、深いところに潜ると、ウエットスーツの浮力が失われて、いわゆるマイナス浮力の状態になるが、そこから浮上するにはフィンの推力が必要になる。

フィンには、ショート（短いもの）、ロング（長いもの）といった形状の違いに加え、素材にもプラスチック、ゴム、グラスファイバー、カーボンと、さまざまなものがある。また、同じ素材でも、製品によって硬さが異なる。単純に言って、硬くて面積の広いものの方が、高い推力を得られる。とくに深いところから浮上する際には、反発力の強いフィンが有利だ。反面、こうしたフィンを使いこなすには体力・筋力が求められる。

【ウエットスーツ】

一般的には、表層の水温が高い夏場であっても、深くなるほど水温が低下する。水温が低いところでは体力を消耗しやすく、急激に水温が変化するとショックを引き起こす可能性もある。この低水温・水温変化に対応することが、ウエットスーツを着用する、ひとつめの理由だ。

また、水中に潜っていると、クラゲなど

●手銛の作り



【柄（シャフト）の素材】

上から竹、カーボン、ステンレス。近年、一般的なのはカーボンだが、独特の風合いがある竹の柄を好む人もいる。小島氏は竹の手銛を愛用し、これで大型魚を何匹も仕留めている。



【銛先は交換可能】

銛先の根元にネジが切れ、交換できるタイプのものでお勧め。強度が要求されるので、手持ちの銛先などを加工してネジを切る場合は、スピアフィッシング専門ショップに依頼するといい。



【シャフトの継ぎ手】

3mを超える手銛は、持ち運びしやすいよう、2本継ぎのものが一般的。さらに長い手銛には、3本継ぎのものもある。ステンレス製の継ぎ手（ジョイント金具）をねじ込んで固定する。



【ゴムの取り付け】

ゴムは尻手についた輪に取り付ける。ゴムの径は、6～16mmの各種あり、11mm径程度までは輪にしたり、2本ままとめたりして使う。ゴムの先に付けた手当てバンドを、親指と人差し指の股に通して握る。

の毒針や魚のヒレ、岩などに触れてケガをする可能性がある。とくに海底付近で魚を待ち伏せる際は、海藻などが体に直に触れるだけで気持ち悪く、ストレスを感じるものだ。これを避けることが、第二の理由。

そして最後に、深いところからの脱出を容易にしてくれること。ウエットスーツには浮力があるため、潜る際は「ウエイト（オモリ）」を腰に巻くが、なにかのトラブルがあったとき、このウエイトを外すことで浮上が容易になるのだ。

ウエットスーツには、さまざまなタイプがあるが、体を保護し、着脱がしやすい、上下セパレートフルスーツがお勧め。ネオプレン生地は、当然ながら厚みのあるほうが保護性、保温性、そして浮力が高い。

考えておかなければならないのは、ダイビングと異なり、スピアフィッシングでは潜っている時間より水面を泳いで移動する時間のほうが長いということだ。とくに夏場は表層の水温が高く、日差しも強いので、厚手のウエットスーツを着ていると、気づかないうちに汗をかき過ぎて脱水症状になることもある。夏は1.5～3mm厚、秋～春は5mm厚といった具合に、シーズンに応じて使い分けるのがベストだ。

装着するウエイトは、一般的には、体重の10%前後（体重80kgならウエイトは8kg）が目安だ。ただし、ウエットスーツの生地の厚みが変われば、浮力も変わる。実際にウエイトを装着して、海中で立つように浮かんだとき、顎が出るくらいにしておくのが望ましい。

また、潜る深度によっても、装着するウエイトの重さは変わってくる。たとえば、浅いところでは、浮上する距離が短いので、ウエイトを1kgほど重くしてスムーズに潜行できるようにする。一方、深いところまで潜るときは、ウエイトを逆に1kgほど軽くする。深いところでは水圧でウエットスーツが潰れ、浮力が減少するので、ウエイトが重いと浮上する際に苦勞するからだ。

【グローブ】

魚のヒレや岩から手を守るために、グローブは必須だ。銛を持ったときにグリップしやすい、手のひらの部分にゴムが貼られたものを用意しておこう。生地は、硬過ぎると手に触れた物の感触が伝わりづらいので、ケブラー系のものがお勧め。ホームセンターなどで売られている、作業用の手袋で十分だ。